
浮人形

九条 樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

浮人形

【Nコード】

N1403R

【作者名】

九条 樹

【あらすじ】

九条樹の短編2作目

東京に転勤してきた男性が、渋谷で一人の女性を見つける。その女性が何故か気になるのだが……ある夏の日の出来事。

(前書き)

浮人形：行水のとくに子供が水に浮かべて遊ぶ玩具の総称。晩夏の季語でもある。現在でも子供向けの入浴剤とセットにした商品が販売されており、ポリエチレンや塩化ビニールや発泡スチロールなどのごく軽い素材が一般的。

東京に越してきて早1ヶ月。

別に東京に来たかったわけではないが、サラリーマンとしては転職の辞令を受ければ、どこへでも行くしかない。

東京は人が多すぎて疲れるから嫌だった。

だが、今のご時世断るなんて選択肢はあり得ない。しかも東京本社への転職といえば栄転だ。

本社へ行きたい人間は大勢いるのだから文句なんか言えば罰がたるともものだ。

うんざりしながらも東京生活を始めるしかなかった。

そんなある日、休日を利用して東京見物のため渋谷までやってきた。

なぜ渋谷なのか。

それは自分でも不思議なのだが、雑誌で見た「全国でも珍しい日本狼の狛犬」がどうしても気になったのだ。

その雑誌によると、珍しい狼の狛犬がいるのは宮益御嶽神社と記載されていた。そこでその狛犬を見るため渋谷までやってきたのだ。

山手線に限らず、東京というところはどの駅を降りてもとにかく人が多い。

渋谷も駅を出ると大きな交差点があり、やはり凄い人の量だ。

人混みが苦手なのにこんなところに来てしまうなんて……

少し後悔しながらも交差点で信号が青になるのを待つ。

7月も終わろうとしている東京の夏。天気予報での予想気温も今日は35度まで上がると言っていた。直射日光に肌が焼ける。素肌を露出している部分が、じりじりと焼かれる音が聞こえてきそう

なほど痛い。

ハンカチで拭いても拭いてもとめどなく噴き出す汗が、肌を服をまとわりつかせて気持ちが悪い。

交差点の向こう側にもたくさんの方がいるが、みんな日傘をさしたり、団扇であおいだり、汗を拭いたり暑そうにしている。

そうして何気なくそちらの方を見ていると、その中にひと際存在感のある女性を見つける。

何がどうとは説明できないが人混みの中にあつて何故か際立つ存在である。

その女性は暑くないのだろうか？ともすれば秋物に見えるような濃い茶色のワンピースを着ているにもかかわらず、涼しげに立っている。何故かその女性から目を離すことが出来ない。

不思議な気持ちで女性を見ていたが、信号が青に変わると一斉に人の波が動き出す。

その人波に遮られ一瞬目を離れた際に、その女性は人波の狭間に消えてしまった。

私は交差点を渡りながら懸命に見失った女性を捜すが、見つけることができない。

私は仕方なく目的地である宮益御嶽神社へ歩きだす。

宮益御嶽神社の入口は、宮益坂に面するビル間にあり、少し分りにくい。

雑誌にあつた地図の記憶を頼りに石段の参道を見つけ、その石段を上ると境内への道があり拝殿へと続く。

拝殿前に目的の狛犬がある。

雑誌で見てからというものの、どうしても来てみたいと思っていた宮益御嶽神社だが、実際にみると何も感じない。

不思議だ、なぜあんなにここに来たいと思っただらうか？

本殿を一回りしたがやっぱり何も感ずるものがない。しかしせつ

かく来たのだからとお参りをして、来た道を引き返す。

と、その時。

石段の参道を下りる女性を見つける。

私は心が高鳴るのを感じる。あの後ろ姿…… 交差点の反対側から見ただけなのに、その後ろ姿の女性があ的女性だと確信を持っている。

大急ぎで走って石段の坂まで戻るが、もうその女性の姿はなかった。

とにかく参道を下り辺りを見回すがやはりその女性を見つけることは出来なかった。

しばらく周辺をうろろろしていたが、いつまでもこの辺りにいても仕方ないので帰ることにする。

宮益御嶽神社へ来ること以外、特に目的もなかったし、今からどこかへ行ってもよかったのだが、結局東京というところは、どこもかしこも人だらけで疲れるだけだ。

そう考えここから直接家まで帰ることにした。

家には、渋谷から山手線に乗り、新宿で東京メトロ丸ノ内線に乗り換えて荻窪まで約20分の道のりだ。

荻窪は快速が停まるのだが各停とは5分ほどしか違わないため駅に着いて先に来た電車に乗るようにしている。

新宿に着くと各停の電車が停まっていたので乗ろうとしたが、丁度快速がやってきて、その快速の発車待ちだったため、快速に乗ることにする。

荻窪まではすぐなのでドアの前に立つ。そして電車が動き出した時、鋭い視線を感じて先ほど乗ろうとした各停電車を見る。と、あの女性がいた。

先ほどは後ろ姿だったが今度は正面だ。しかも明らかにこちらを見ている。完全に目が合っているのだ見間違いではない。

しかし動き出した電車の中ではどうすることも出来ず、結局荻窪

まで帰ってきてしまう。

荻窪の駅で降り、先ほどの女性を気にしながらも、徒歩で10分程にある自宅マンションへ向かう。

自宅と言ってもここは会社が独身者用に借りているマンションだ。以前は東京本社に勤めていた誰かが使っていたのだが、私と入れ替わりで出て行ったらしい。

マンションの1階はコンビニエンスストアになっており、そこでビール2缶とちよつとしたつまみに雑誌を買ってエレベーターへ向かう。

このマンションはおしゃれでエレベーターがガラス張りになっていて外が見えるようになっていいる。

そのエレベーターを使い私の部屋がある23階のボタンを押す。23階の1フロア8室全てが会社の持ち物となっている。

その時また視線を感じた！

エレベーターの中、ガラス越しに外を見ると、マンション前の歩道から誰かがこちらを見てる。

あの女性だ。顔ははつきりと見えないが私は確信する。

しかし…… あんな場所から私がかかるのだろうか？

それよりも今日一日ずっとあの女性が俺の周りに居る。なぜだ？初めはなんとなく興味を持ったが、今は……

完全に私をつけいる、私を見ている。そしてあの電車での鋭い視線。それらを考えると逆に恐怖すら感じる。

私は言い知れぬ恐怖に駆られエレベーターを降りると走って自分の部屋である2311号室に向かう。

こんな時に限って鍵が見つからない。何度もポケットを探し、やっと探り当ててドアに鍵を差し込む。

後ろでエレベーターが動くモーター音が聞こえる。

エレベーターは2基ある。しかも高層マンションだ。常に動いていてもそれほど不思議ではないが今は何故かすごく嫌な予感がする。

鍵を開けた私は大急ぎでドアを開け中に入ると震える手で鍵を閉めチェーンをかける。

そしてドアに耳を当て外の様子をつかがう。

エレベーターが開く時に鳴る音がかすかに聞こえる。

どうやらこの23階で止まったようだ。

ドアノブを両手で押さえながらさらに神経を集中させて様子をつかがう。

両手は汗でびっしょりだ。暑さのせいではない。

しばらくじっと聞き耳を立てているが、その後何の音も聞こえない。

どうやら思い過ごしか……

そう思い、一息をつき玄関で靴を脱ぐ。

玄関からは廊下がのび、突き当たりがリビングになっている。

廊下の左手には風呂とトイレが、右手には6畳の部屋が1つある。

私はとりあえずリビングに向かう。

そしてリビングのドアを開けた時、心臓が止まりそうな衝撃を受ける。

あの女性がリビングの中央に後ろ向きに立っているのだ。

私は女性を指さしたまま言葉にならない声を弱弱しく発しながら硬直してしまう。

女性はゆっくりと私に向き直る。

そして一言……

「あなた…… 私のこと見えてるよね？」

「あ、あ、ああ…… 見えてる」

なんとかそれだけ発声することができた。

「よかった……」

そう言つと、その女性は満足したようにスツと消えていなくなつた。

女性が消えたと同時に、体の硬直が解けた私はその場に座り込む。

あの女性は誰だったんだろう……

ふと見ると、先ほど女性が立っていた場所に、日本狼をかたどった狛犬の浮人形が落ちていた。

震えの止まらない手でその人形を掴む。

(後書き)

後日、ひよんなことからある事実を知ることとなる。

東京本社で仲良くなつた同僚を家に招いた時のことである。

「お前、この部屋なの？」

「そうだが…… 何か問題でもあるのか？」

「だってお前…… ここは、以前住んでた女性が自殺したつてんでずっと使われてなかったはずだぜ？」

どうやら私の前に、この部屋を使っていたのは女性で、自殺をしたらしい。

しかも、あの宮益御嶽神社の拝殿近くの木を使つての首つりだったようだ。

女性はいわゆるキャリアウーマンで、若くして課長になつたものの、あるプロジェクトで会社に多大な損害を与え、一線から外されたようだ。

それによつて直属の上司にまで疎まれ、早い出世を妬んでいた同僚達からも無視されるようになり、最後は窓際へ追いやられ、誰も彼女に話しかけることもなつたようだ。

遺書はなかつたらしいが、全員から無視され続けたことが自殺の直接の原因と噂されているらしい。

同僚からそれを聞いた私は、もう一度あの場所へ行くことにした。境内では、あの日部屋に落ちていた物と同じ浮人形が売られていた。

あの女性は何かを訴えかけたのだろうか？

私があ的女性を雑踏の中で見つけ、もう一目見たいと捜したことで満足したのだろうか？

未だに謎のままだが、あの日以来彼女を見たことはない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1403r/>

浮人形

2011年2月23日22時56分発行